

学 園 叢 報

☆昭和五十三年度

◎日本印度学仏教学会学術大会

第廿九回学術大会は、七月十一日・十二日の両日にわたり、京都市仏教大学において開催された。今回も十の部会に分れて、熱心な研究発表がおこなわれた。本学からの研究発表者は、次の通りであった。

立正安国論の略本と広本について 中 条 暁 秀

◎日本仏教学会学術大会

「悟りと救い——その理念と方法——」という共通課題のもとで、十月二十一日・二十二日の二日間、わたり長岡京市の西山短期大学を会場として、学術大会が開催された。二つの部会に分れ、三十名の研究発表があり、盛会であった。本学からの発表者は次の通りであった。

感應道交の世界 ——日蓮聖人の身延生活——

若 杉 見 龍

◎学内研究会

昭和五十三年も例年通り、学内の月例研究発表会を開催した。尚、この学内研究会に対し、同窓会の灘上恵教

会長は、学術研究進展に資して、成果を挙げてほしいと多額の助成金一封を寄せられた。爰に深く感謝の意を表すと共に、研究会一同この好意に報いるべく、益々研究を盛んにして行く覚悟である。

○第二十回——二月二〇日

近世文学と法華信仰

——狂歌・川柳を中心として——

教 授 上 田 本 昌

☆近世庶民の間で大きな発展をして行った「狂歌」と「川柳」について、特に法華信仰との関連を論じた。『黄表紙』や『洒落本』及び『滑稽本』などの流れから生れた川柳の中に、当時の信仰生活に生きた人々の様相を窺うことができる。又狂歌の中にも蜀山人を始め、見るべきものが多く、庶民と法華信仰のかかわりを考察した。

○第二十一回——四月二十一日

仏教精神の発掘

教 授 疋 田 英 肇

☆日本仏教の精神は、キリスト教の影響を受け、その思想によっておおわれている所がある。例えば宗教について語る時、大部分の者は、キリスト教について

話をしている。このおおいかぶさっている点を払いのけて、仏教本来の精神を発掘すべきである。と論じ、クリスチャンとマルキストにも言及した。

○第二十二回——五月二十六日

バガバット・ギター

教授 高橋 堯 昭

☆バガバット（聖なる者）、ギター（韻文詩）は成立年代からみても法華経と相似している点が多くある。同時代のインド文化に咲いた二つの花だと言える。パンドーラ王の子、アリジュナに対して、クリシュナが語った言葉が、バガバット・ギターとなった。アートマン（自我）とブラーマン（超越者・神）との交わり等について論究した。

○第二十三回——六月二十三日

「五時八教」の名称

教授 中里 日 応

☆最近、大正大学の関口真大博士が、五時八教は天台大師が立てた教判ではない、と言う説を学会で発表し、反響を呼んだ。この説に対して、竜谷大学の佐藤哲英博士が反論を学会で発表し、両者の

論争が続いているが、この問題をとりあげて、五時八教という名称がどこから出たのかを論究した。湛然の門人といわれる明曠の「八教大意」に出てくる語であるという。（尚この発表は、中里日応教授にとつて、最後の研究発表となった。九月廿八日遷化。深悼。）一八一頁参照。

○第二十四回——九月二十九日

「感応道交」について

講師 若杉 見竜

☆『法華玄義』に「感応」の語がある。衆生と仏が交ることを道交という。宗祖は身延山に在って、唱題・説誦の中に法悦を感じておられた。凡夫と仏と同体となると云うのであるからあえて三十二相を要しない。又宗祖の安心は個人の成仏ではなく、通一仏土・万民の成仏を目標とされている。と論じて、更に靈山浄土に及んだ。（尚この研究は、日本仏教学会で発表された。）

○第二十五回——十一月六日

言語についての一考察

教授 大森 孝

☆「言語」の変化・起源・類別等について論じ、科

学的言語の発達に至り、更に言語と思考、及び文化形式にまで及んだ。(詳細は本誌一六三頁を参照されたい。)

○第二十六回——十二月五日

「王羲之」について——昇華と燃焼——

助教授 高橋 堯 慧

☆中国の画期的な書家として著名な王羲之について論じた。彼はオリジナルな書を現し、書を芸術にまで高め昇華して行った。東晋時代に現れ、貴族王氏の一族で、儒・仏・道に通じ、武昌・臨川・会稽等主要都市の長官をつとめた。永和九年に傑作「蘭亭の序」を作り、退官後は見るべきものがない。燃焼したものと考えられる。

○第二十七回——一月二十五日

「身延参詣記」について

教授 林 是 幹

☆徳富蘇峰著の『身延参詣記』を中心として、『身延町の文化財』を参考にしながら、当時の身延参詣の状況について論じた。特に西谷に建立された清浄寺について、その由来を説き、鑑師と堀の内関係、及び本堂建立の施主たる姫路の城主酒井

伯爵夫人(文子)等について、詳しく紹介された。

○第二十八回——二月二十三日

大曼茶羅中の異字と法華玄義訓読について

講師 若杉 見龍

☆中国で經典が訳出された一、二世紀頃は隸書又は篆書であった。宗祖の曼茶羅中にも、この双方の書体が見られる。異字としては、多宝・太神・達婆・天王・菩薩・鬼等の文字に見られる。又「法華玄義」の訓読について、仏教大系本、大正本、国訳一切経本、憂波提舎等の各本と比較しつつ、訓読の仕方に相違のあることを究明した。

○昭和五十三年度大学卒業論文論題・氏名

(論 題) (氏 名)

日蓮聖人の父母観	石川 勝法
宮沢賢治の法華経観について	牛崎 海秀
日蓮聖人に於ける唱題について	大友 邦夫
日蓮聖人と元寇	児玉 常見
日蓮聖人に於ける唱題の功德	小滝 瑞教
日蓮聖人の謗法観	高津 憲城
日蓮聖人と慈悲の心	斎藤 茂美
日蓮聖人における伊豆流罪の意義	高谷 幸弘

学園だより

日蓮聖人の佐渡の法難
 宗祖池上入滅前の心境
 観心本尊鈔に於ける宗祖の本尊観
 布教の歴史の変遷と現代布教のあり方について

日像上人について
 野村 満

宗祖の祈禱観
 橋田 啓一

日奥上人と不受不施
 原 行秀

法華経晋門品について
 松川 龍圭

冠鑑日親上人について
 森田 顕昇

西谷檀林善学院日鏡上人
 山本 誠

日蓮聖人法難観
 横山 弘之

日蓮聖人の佐渡での御生活
 若林 稔

日蓮聖人身延山九ヶ年の御生活
 脇村 弘和

日蓮聖人の女性観
 若園 純永

開目抄に於ける日蓮聖人の諸宗批判
 石割 昭雄

宮沢賢治について
 寺坂 三法

「慈悲」——特に宗祖の慈悲観——
 小 山 芳 広

菅野 義 尚

○学園理事長に竹下真孝師就任

本学園の理事長に由緒寺院の厚木市妙純寺貫首竹下真孝師が就任された。去る五十三年十二月に祖山久遠寺の人事異動があり、小林頭栄前理事長退任の後を受けて、新理事長に就任された。竹下理事長は四十九年六月に退任され妙純寺の復興に尽力して来られたが、この度再就任されたものである。

尚、今回の異動にともない、本学園図書館長の秋山智孝教授は、久遠寺の庶務部長に、また望月海淑教授は同寺法務部長に就任された。

○山梨県私学教育研修大会

第十回山梨県私学教育研修大会は、去る五十三年八月十八日・十九日の両日にわたり、山梨学院大学を会場として開催された。五十二年に身延山大学で開かれた第九回大会のあとを受け、今回も県内の各私学から二五〇名が集り、七部門に分れて研究発表・討議が実施され盛大であった。第一日目は日本私立大学協会専務理事矢次保氏の記念講演『建学の精神と私学教育のあり方』があり

各分科会にわかれて二日間の研究がおこなわれた。本学からの研究発表者は次の通りであった。

寛永の身池対論について

町田 是正

○中里日応教授遷化

本学の教授として永年にわたり宗門子弟の教育に尽力してこられた中里日応先生は、去る九月二十八日遷化された。六十八歳。先生は身延山鏡円坊の住職をされつつ本学では「天台教学史」を講じ、高校では「書道」の授業をも担当された。学園の評議員や同窓会本部役員として活躍され、特に本短期大学を四年制の大学に昇格させ



(故中里日応教授)

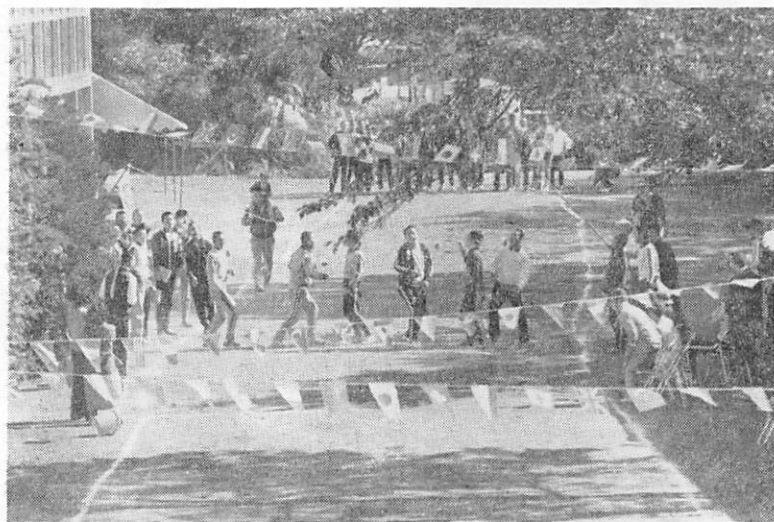
るべく熱意を燃やし続けられた。

また宗会議員として宗門の発展に尽し、奥之院思親閣別当として備整に努力され、更に身延町教育委員長・教育長等を歴任され、地方自治教育行政にも貢献された。突然の遷化を惜しむと同時に深く大心院日応上人の増円妙道をお祈りする次第である。尚、先生の遺志について遺族から図書館へ多額の金一封が、寄せられた。

○学園祭盛大に開催

五十三年度の本学々園祭は、十一月三日「文化の日」を期して、六日まで四日間におたり、全学あげて盛大に開催された。第一日目は本学園の特色を活かして、学生による「高座説教」が実施された。長谷川寛慶教授の「模範説教」に続いて、高校から大学まで、各クラスの代表が次ぎ次ぎ高座に登って、儀式や話し方を披露し合った。

二日目は校庭で運動会をくりひろげ、終日スポーツに若い血潮を燃やした。竹馬競争・騎馬戦など身心を練磨しつつも楽しい種目で歓声に終始した。三日目は体育館に舞台を特設し、演芸会・バザー・お茶の会を始めとして生花・書道・写真・子供会等各種の展覧会が教室を使って催された。特に本年は父兄の協力をえて全国各地方



(秋の学園祭の一コマ)

の名産品を集め、「物産展」を開き好評をえた。

最終日の四日目は、学内の弁論大会を行ない各クラスの弁士が熱弁をふるった。本学の弁論大会は伝統も古く幾多の名弁士を産んで来たが、毎年開かれる学園祭にはつきものであつて、「飛び入り」や先輩の「模範弁論」もあり、活気溢れる中に学園祭の最後を飾った。(五十二年度学生自治会役員 会長駒林利泰、副会長望月健二、副会長門田秀嗣、書記長森塚竜昭、書記中尾雅司、会計鈴木一郎、監査安川久、議長団山田覚一、湯垣輝直、末松正文、風紀委員長水野治男、同副委員長亀井隆司)

公開講演会

二月二十二日午後一時より、本学と身延山支院の共同主催による公開講演会が開催された。今回は名古屋大学教授の宮坂宥勝博士を講師に招き、『現代人と仏教』——人間の原点を問う——というテーマであつた。

当日は本山、支院、大学、町方から多数の来聴者があり、会場は満員の盛況であつた。現代人はエゴ (ego) 即ち「自我」の意識が強いために、自分独りよければそれでよしとする傾向が強い、仏教の説く真の意味での「生命の尊さ」や「因縁」をよく理解していくことが大切である。西欧の「人間中心主義」では行き詰りを生じ

人間だけの幸せを求めることは、やがて人間を破滅に導くことになる。人間を含めたすべての生類、それを取りまく大自然を考え人間も自然の一員であると言う立場をとるのが仏教である。宇宙世界の浄土化を考えていくことである。人間が科学の力を過信して自然を破壊していくことが、進歩であると思うならば、やがて人類は滅亡してしまふことになるであらう。と述べ人間の原点たる生命の尊厳性に及んだ。

日蓮聖人が清澄山において、登る東天の太陽に向い、声高らかに唱題された意味も、すべての生類の根元である大日輪に向われたことの深い意義を考えていただきたい、と結ばれた。

同窓会役員会開かれる

○本年度第一回役員会

五十三年七月五日、本学において本年度の同窓会本役員会が開催された。灘上恵教会長以下の本部役員が出席し、本会の基金、本部運営、図書充実援助等について協議した。又本部事務局の石川是行師は、身辺多忙のため辞任された。

尚、本部の幹事によって幹事会を組織することになり役員会及び総会に提出する議案や、本会運営のための素

案を作ることになった。幹事長は中里日応師、副幹事長は長谷川寛慶師に決った。

○第二回役員会

本年度第二回同窓会役員会は、五十四年二月十六日に本学において開かれた。副会長白川栄澄師、幹事長中里日応師を始め理事で選化され欠員となっている役員補充を行う。副会長は総会で選出することになり、渉外幹事に長谷川寛慶師、会計幹事には町田是正師がそれぞれ推薦された。(庶務幹事は従来通り深沢義雅師)

尚、幹事長には長谷川寛慶師、副幹事長には上田本昌師が選出された。理事の欠員については地区(支部)からの推薦をまつて決定することになった。

三年毎に一回開かれる同窓会の総会については今秋十月二十四日に決定した。

——お 願 い——

◎本誌は「会員制」となっております。会費は年額二千五百円です。発行のつど同封の振替用紙をご利用の上、ご送金願います。

◎お知り合いの方々の中で、まだ入会されていない方にはぜひ御入会下さるようお勧め下さい。よろしくご協力の程、お願い申し上げます。